京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十四卷　第三號

大正十一年三月一日發行

論叢

最低生活費課稅說を駁す　法學博士　小川鄉太郎

マルクス氏餘剩價値說の評論　法學博士　田島錦治

戰國の都市　文學博士　三浦周行

小作制と小作法　法學博士　河田嗣郎

我國に於ける國民所得の發達　法學士　汐見三郎

經濟道と經濟術　法學士　作田莊一

時論

我邦の相續稅を論ず　法學博士　神戸正雄

說苑

地學觀社會學說に就きて　法學博士　財部靜治

リッケルトの價値體系　文學博士　米田庄太郎

雜錄

エルンスト、フリードリッヒの經濟階段說　經濟學士　黑正巖

リツケルトの價値體系（三、完）

米田庄太郎

第一節　「開かれた體系」
第二節　完全終結の三階段
第三節　觀照と活動及び物件と人格　（前號既載）
第四節　六つの價値範域
第五節　學問と世界觀　（本號所載）

第五節　學問と世界觀

價値體系問題と世界觀問題　吾人は、今價値體系の論述を終ることが出來る。妥當の要求を以て現はれ、此くて哲學の問題を含む價値の六大部類は確實に設定され、而して吾人は啻に論理學、倫理學、美學及び二種の宗教哲學を、必然的な哲學的學科として理解しただけでなく、更に是れまでまだ存在しない一の部分、卽ち完全に終結されたる人格的現在生活の哲學が、要求されてくる。又機に應じて將來が發達させるであらう處の新しき財は、適當に其地位を見出し得可きである。而して然る以上、吾人の體系は開かれて居て、しかも同時に一の體系である。殊に吾人は三つの階段に於て、單なる並列を立てたゞけでなく、一の位階を立てたのである。此くて吾人の存在の統一的意義を考究することが、原理に於て可能となるのである。

併し他方に於ては、同樣に斷乎として言明さる可きものがある。夫れは此の價値體系は世界觀問題の解決に付て、吾人に何物をも教へないと云ふことである。是れまでに位階と云へるは、夫れは常に只一の形式的關係を意味するだけのものと、解さる可きである。何れの財が最高のもの、或は中心的なものと認めらる可きか、如何なる價値範域から吾人は世界觀の一の統一に進む可きか。又價値の如何なる統一的に決定されたる階段連續が作られるか。此等の問題は全く解決されずに殘つて居る。人格的或は物件的系列が優位を占むるか。一元主義或は多元主義が眞理を與へるか。吾人は「世界」を否定す可きか、或は肯定す可きか。吾人は絕對的價値は靜觀の最後の階段にあらねばならぬと主張することも出來ない。是れ恐らくは兩者は、同價値的に相並立するか、又は吾人は完全終結的總體の全範域さへも、一の超越者としては疑問であると、言明し得るからである。人若し夫れが爲めに、一神教も亦汎神教も共に排斥するならば、其の時には將來財及び現在財は、人格的及び非人格的方面に於て、如何に相互に關係するか。吾人はより多く學問に從ふて、又はより多く藝術に從ふて、世界觀を構成す可きか、或はより多く倫理に從ふて、又はより多く完全に終結されたる人格的現在に從ふて、世界觀を構成す可きかは問題である。理論的理想主義が正當であるか、又は審美的理想主義が正當であるか、或は倫理的理想主義が正當であるか、又は愛の理想主義が正當であるか、或は此等の見地の何れも、偏局な、不完全なものであるか。總て此等の問題は、何れも當面には同等に肯定され得る樣に見える。而して余輩は、此處に何等の斷定をも豫示

しようとは思はない。實に哲學は純學問として、果して此等の問題に對して、一般的に答解を與へ得るもので、あるかと云ふことさえも、疑はしいのである。要するに哲學は價値體系に基いて、生活意義の夫れ自身に於て徹底的なる闡明の、種々なる可能的諸形式を展開し、而して各個人をして、夫れ夫れ其の個人的、超學問的特性に、最ともよく適合する世界觀を、選ばせることを以て滿足せねばならぬ。いづれにしても此等の事は、價値體系其物に關することでないから、余輩は此處に敢て之れに觸れる必要はあるまいと思ふ。

價値體系に於ける哲學の地位　併し吾人は尙ほ、學問としての哲學の性質に關する、他の一問題を、少しく論じて置かねばならぬ。吾人は上に擧げたる總ての問題に、一の包括的な世界觀を以て答へることが出來たと假定しても、寧ろまさしく其の時に、尙ほ財の體系に關して一の問題が起るであらう。夫れ世界觀論は是れまで、まだ財の體系に於て全く何等の地位をも與へられて居ない。併し哲學も矢張り其の中に編入さるべきものである。而して哲學は確かに學問であらんことを、欲するものである。此くて哲學は、第一の價値範域に屬するものゝ如くに考へられる。併し若しそうであるとすると、哲學は常に只、價値の形式的秩序を立てるだけに、止まらねばならぬことになる。其の理由は明白である。夫れ生活意義の一の統一的及び內容的闡明は、最早一の開かれたる體系の性質を有しない。蓋し開かれたる體系とは、つまり價値諸範域は、只形式的に決定されるだけのものであると云ふ思想に基いて、立てられたるものであるからである。吾人若し一の世界觀を保持する爲めに、如何樣にかして價値體系の圖式、或は型を充たすならば、其の瞬

間に體系は直ちに閉ぢられて仕舞ふ。此くて余輩は余輩の出發した問題に再び立ち戻る。而して困難は一層增大してくる。余輩は學問は一の將來財であると認めたのである。されば學問的基礎に立つ、一の閉ぢられたる世界觀なるものは、あり得ないことになるのである。閉ぢられると云ふことは、つまり完全終結性と云ふことゝ、同じ意味である。されば世界觀は、學問以外の他の價値範域に屬す可きものとなる。勿論夫れは靜觀の範域內に止まる可きである。しかし幾多の世界觀が、事實上存在すると云ふ事情は、之を完全終結的總體の範域に編入されるを許さないと思ふ。而して夫れ故に世界觀は結局完全終結的特殊性の構成物として、藝術作品に類似せねばならぬ。是れ人々が實に屢々信じたことである。而して余輩の價値體系はよく其の理由を理解させるのである。

學問としての哲學の意味　夫れに拘らず、哲學は閉ぢられた體系としてさえも、藝術ではない。哲學は寧ろ全然學問として止まるのである。詳しく云へば哲學は啻に其の基礎に於て、學問であるだけでなく、又其の全體に於て學問である可きである。而してまさしく余輩の財の體系は、之を示し得るのである。此處に吾人は價値諸範域は、是れまで夫れに對して擧げられた實例よりも、より多くを包括し、夫れ故に直ちに其等の實例によりて、命名さる可きものでないことを、忘れてはならぬ。此くて學問の概念は擴大されることが出來るのである。さきに述べし事は、特殊科學の全體に適合し、又夫れに對しては妥當力を有するのである。併し實在全體の認識は、遠い處に置かれる一の目標である。而して專門學的研究が、まだ到達して居ないものを成就する爲めに、

箇別學科に先だちて進むと云はれる、其等の時々要求される假設的形而上學は、全く疑はしき企だと思はれる。併し世界觀論としての哲學に於ては、實在認識が取扱はれるのでない。かゝる哲學は生活の意義、又其の中に含ませて實在認識の意義を、究明せんとするものである。而してまさしく此の特殊なる任務に於て、哲學が閉ぢられると云ふこと、或は完結性に關して、依て以て箇別科學から區別される普遍的原理が、明らかにされ得るのである。哲學は論理學としては、必然的に理論の最後の目標を反省する。此くて夫れは形而上學の地位に入り込む。而して夫れは生活の意義を究明せんと努力するならば少なくも人間の存在の有する全體意義の、一の統一的究明の企だてに於て、何處でも一時的な或物に止まることは出來ない。夫れよりして吾人は、特殊科學は常に將來を待つことが出來るが、是に反して哲學は單に一の特殊的終結に過ぎないものを最後の終結と見る危險を犯してさへも、一の最後の終結に達せんと、努力せねばならぬことを覺るのである。殊に完全終結の哲學は、完全終結性を狙らふのである。併し此の事情は、只哲學を科學に對立させるだけに止まり、決して哲學をして、其の學問的性質を失なはせるものでない。哲學は啻に靜觀的であるだけでなく、夫れが判斷及び概念の形式を有する以上、又理論的印を押され、學問として認めらる可きものである。何人も箇別的研究の方法を、唯一の學問的方法と宣言す可き權利を有しない。

されば世界觀論と學問との分離に付て、只一事が正當である。即ち必然的に最後の目標を問題とする哲學は、夫れによりて一定の意味にて、不終結的發達系列に參加することを否まれ、即ち

不終結的總體性を棄て、而して己れに必要缺く可からざる完全終結性を成就する爲めに、特殊性を偏愛すると云ふことである。蓋し哲學は、理論的靜觀の本質は學問を研究する有限的、時間的箇人に對する、材料の無盡性或は不終結性の爲めに、完全終結性と總體性との結合を、最高の意味に於て排斥するものなるを、觀破するからである。されば哲學は又息みなく前進する發達の流れの中に、一の靜息點を見出すことを狙らひ、生活意義に對して、是れまでに成就されたるものゝ重要を、明らかに意識させる爲めに、靜かに立つ處の學問的活動として定義され得るのである。確かに夫れが爲めには、眞理の爲めの一の勇氣(夫れは同時に誤謬の爲めの一の勇氣である)が必要である。更に之れと一の任意的自制、卽ち將來に關して諦めると云ふことが結び付く。併し此の勇氣と諦めの両者は、理論的靜觀が其の目標を固持して、終結を求めるに於ては、かゝる完全終結の靜息點を要すると云ふことによりて、正當とされるのである。

併し不終結的總體性を棄てると云ふ事は、學問としての世界觀論の威嚴を、毀損するでないかと云ふ問題が起り得るが、決してそうでない。是れ其の特殊性及び諦めは、特異な性質のものであるからである。要するに世界觀論は恐らくは、學問と云ふ將來財の發達進行中に、入り込むを否まないであらう。否な吾人は哲學は閉ぢられたる、或は完結されたる諸體系に於て、此くて完全終終的特殊性の諸形體に於て、終りなく益々發達すると云ふことが、世界觀論としての哲學の本質中に含まれて居ると云ひ得るのである。哲學史の考察は、總ての決定的終結を疑はしく思はせ、又諦めを強いるのであるが、同時に夫れは又、組織論者を大に勵ますことが、出來るのであ

る。世界觀論の過古は、一見して想像されるほど、只墳墓のみを以て充たされたる、墓場に似て居るのでない。確かに早代の哲學的諸體系が、實在認識に付て保有する處のものは、大部分古くなつて居る。而して其の最とも多くは、吾人に只「歷史的興味」を起させるだけである。併し生活の意義を尋ね、一の閉られたる體系に於て、之を表現せる思想家は、若し正當に理解されるならば、決して死んで仕舞ふては居ない。彼等の多數は今日も尙ほ生きて居る。而して彼等は愈々決定的に人間の存在の最後の目標を探求しただけ、此くて彼等の體系を完成せんと努力しただけ、それだけ又彼等は愈々生きて居るのである。彼等の死滅と見える彼等の特殊性の終結が、まさしく彼等に不滅性を與へるのである。彼等は一の終結を成就し、最後を遂げることが出來た。夫れが卽ち彼等の偉大である。されば彼等は終りなき事象の流れの上に高く聳へ、過古の暗黑から吾人に光を投ずるのである。

此くて世界觀論の特有の學問的形式が、始めて正當なる光りの中に照らされてくる。閉ぢられた體系の完全終結的特殊性は、つまりは不終結的總體性の爲めに役立ち、夫れによりて又其の尊嚴を分與される。哲學者は確かに特別な地位にある。哲學者は、發達は彼の今立てたる體系を、早晩追ひ越すであらうことを知つて居る。併し彼は常に彼が其の瞬時に所有するものを確立して之を發達の流れの中に沒失させまいとする。而して彼は彼の先輩よりもより包括的に、より統一的に考へると云ふ確信に導かれて居るならば、かくする權利を有するのである。彼はフイヒテの云へる如くに、先輩の收穫物を己れのものとし、而して自から住む爲めの「家」を建てるのである

吾人は時間的實在として、確かに總て一度は終りを告げねばならぬが、余輩は此の事を學問にも適用せんとする。而して吾人は吾人の箇人的及び特殊的努力の、完全に終結されたる果實は、同時に超箇人的進歩過程の不終結的總體中に於ける、一の必然的階段であると信じて、哲學を考究したいと思ふ。此くて余輩の價値體系を憶ひ起すと、哲學は不終結的總體と完全終結的特殊との中間、將來財と現在財との中間に立つことを覺るのである。

哲學に對する古の地位の決定は、人格的、活動的及び社會的方面に於ても亦、完全終結の第一及び第二の階段の間に、一の中間財が認められるが故に、組織的に愈々重要となるのである。而して此處に始めて、余輩の體系が全く均齊的に建設されるのである。活動の方面に於ては、將來が完全に終結されたる現在に參加し、此くて特殊的完全終結への努力に達したるは、女子に對する男子の活動的、人格的愛に於てゞあるが、靜觀の方面に於ては、現在完成を將來眺望と結合するは知識の靜觀的、非人格的愛、卽ち言葉の固有の意味に於てのフイロソフイアである。完全終結の憧憬としての哲學的愛(エロス)は、充實されることがないかも知れない。哲學は完全終結的なるものの言ふことは單に一の「訥言」に過ぎないであらうことを、熟知して居るに拘らず、不終結的なるものに於て、止まるを欲しない。而して哲學は此の如くに、其の學問的特性を自覺することにより、價値體系の建築物中に要石をはめ込み、夫れを基礎として、統一的なると同時に、包括的なる、一の世界觀に達することを望み得るほど、形式的關係に於て其の建築物を完成するのである。此の「體系意志」には恐らくは一の大なる不遜心、傲慢心が附着してゐよう。併し理論的靜觀の世界に於ては、如何なる「道德的」標準も適用されないのである。